

2021年1月号

喫茶店

文

芸



喫茶店文芸 2021年1月号——目次

平田 ヘイデン デトリタスの雪 1

山中隆二 牧場の朝 8

天野満 真の動機、心の旅 10

ほろほろほろろ 『十二支改め、一支物語』 14

天川 蠟燭 19

マサユキ・マサオ 水晶の眼球 22

氷川省吾 壊れ 29

今日も雪が舞っている。

教科書の写真と窓から見える景色を見比べる。写真に映る空は明るい青色にとろどろ不定形の白い模様が入っている。一方窓の外は重苦しい色の空が町に蓋をしている。

先生が教科書を読み上げる声が耳を抜けていく。

第三次世界大戦を切っ掛けに、地球は寒冷化し氷期に突入した。戦争による汚染や物資の不足もあいまって、地球環境は人にとって厳しいものになってしまった。

人は持ちうる知識や技術を全て使って、今の環境に適応した。遺伝子編集や、生まれてすぐ行われる適応手術などの、様々な分野の最新技術を惜しみなく使って人は絶滅を回避した。

今私たちが着ているセーラー服やインナーも、大戦前と比較して保温性能が著しく高くなっている。

先生はそんなようなことを、単調な声で五十分間話し続けて授業は終わった。

「面白くなかった?」

先生が教室を出た瞬間におもいきり欠伸をしていた私は、大口を開けたまま声が聞こえた方に顔を向けた。私の椅子の横で、幼馴染のアメフラシがしゃがんでこちらを見上げている。いつも楽しそうにきらきらしている目と、瞼が半分閉じた私の目が合う。

「どこが面白いの」

「種の存続の危機にどう対応したとか、聞いててわくわくしない?」

あの時人間が絶滅してたら、ぼくは今日授業を聞いて面白いとも思えなかったのかって想像したりさ」

「しない。……でも空の写真は綺麗だと思ったよ。雪降ってないし。こんな景色見てみたいな」

「じゃあ見に行こうよ」

「雪降ってないとこなんてないじゃん」

「赤道の近くまで行けば雪はあんまり降ってないし、太平洋の辺りは戦争の影響が少なくて汚染物質の雲が薄いから、運が良ければ晴れるかもしれないよ」

図書館行こうよ、くらのの軽さで世界旅行に誘われた。アメフラシは頭がいいけど、たまにものすごく馬鹿なことを言う。

私たちはまだ十歳になったばかりのこどもで、行ったことがある中で一番遠い場所は寮から公共交通機関で二時間くらいの、親が住む集合住宅だ。

そんなこどもがどうやって何百キロも離れたところに行くつもりなのか。

「無理に決まってんじゃない。道分かんないし」

きらきらした目を見ていられなくて、視線を落として吐き捨てた。最近できないことを自覚するのが嫌だった。再来年には特別頭がいい子以外はおとなになって働くことが決まっているのに、できないことが多すぎて怖くなる。

「大丈夫、行き方調べておくから。だから今週の金曜日お泊りの準備してぼくの部屋に来てね」

行くなんて一言も言っていないのにアメフラシの中では私が行くことは決定しているらしい。

断るのも面倒だし、作戦会議と称して泊りがけでおしゃべりするのほきつと楽しい。落ち込みかけていた気分が少しだけ復活して、私は分かったと返事をした。

約束の金曜日。授業が終わって、アメフラシと一緒に私の部屋に荷物を取りに行くことになった。

私より先に外に出て雪を避ける一人遊びをしていたアメフラシを呼ぶ。雪なんて毎日降っているのになんで厭きないんだろう。

校門を出て、隣の敷地に立ち並ぶ寮に向かう。私の部屋は校舎から一番近い建物の三階で、アメフラシはその斜め隣の建物の一階だ。道すがら、アメフラシに話しかけられる。

「ウミウシちゃんは進学する気ないの？」

「うん。勉強つままないし」

「一緒に進学コース行けたらもつとウミウシちゃんと遊べるのに」
残念そうにアメフラシが小さく呟いた。進学しないこどもは十二歳でおとなの仕事を始めるので、進学するつもりのアメフラシと会う機会はきつと少なくなる。

「職場が学校の近くだったらいいな……」

それ以上話すことが見つからず、部屋に着くまでお互い黙って歩いた。

お泊り用の荷物はもうまとめていたのに、荷物を一瞥したアメフラシは「全然足りない！」と言って、私の部屋を勝手に漁って無理矢理荷物を増やした。準備していた小さいリュックサックは、親の家に行く時に使う大きなリュックに替えられてめいっばい詰

め込まれた。破裂しそうなそれはとても休日に友人の家に泊まるための荷物だとは思えない。

まとめた荷物を勝手に持って行くとうとするので、ドアの前で立ち塞がってそんなにいらないと訴えた。しかし聞いてもらえず、アメフラシは窓から飛び出して行った。行先はアメフラシの部屋だろうから、今更荷物を取り返すのは手間が増えるだけだ。諦めてアメフラシの部屋に向かった。

アメフラシの部屋は建物の陰になっていて私の部屋よりも薄暗い。半分開けたドアの隙間から、アメフラシが持ち出した私の荷物を跨いで部屋に入る。私たちの学年だと、部屋はベッドと小さなローテーブルで床のほとんどが埋まるほど狭い。ベッドの半分は大きなリュックサックに占領され、机と床にはたくさんの紙が散らばっている。アメフラシは床の紙の上に座っていた。

「その辺に座って」

視線で示されたアメフラシの斜め前に座る。踏みそうな紙は集めて机に載せた。

「南に行く道と行き方を調べたよ」

アメフラシが手を伸ばして、床に落ちている紙の中から数枚を無造作に取り上げて机に置いた。紙には読みやすい大きさのちよつと読みにくい癖字で、必要な持ち物や行く方法などが書かれているようだった。

「他にも危険な生き物とか、応急処置の手順とか」

喋りながら、アメフラシはどんどん部屋に散らばる紙を机に重ねていった。部屋に散らばっていた紙はすぐに机の上に集まり、机の上の紙は紙束になった。表紙には『修学旅行のしおり』と書

かれています。

「シユウガク旅行ってなに？」

知らない単語だった。

「学校を卒業する前に同級生の友達と泊りがけで行く旅行のこと」

友達と旅行に行くところを想像する。旅行と言えば、親と日帰りで行くものだと思っていた。今まで二・三回くらいしか行ったことがないそれは、いつもとても楽しかった覚えがある。アメフラシと旅行ができれば、きつと——。

「楽しそう」

「でしよう！ それに勉強のためにする旅行だから、授業に出なくてもいいんだよ」

「え、学校休んでいいの？」

「旅行が授業だから休みにはならないって書いてあった」

「そんなのがあるなんて知らなかった」

修学旅行なんて聞いたことがなかったが、アメフラシが調べた資料のコピーには確かにそう書いてあった。

「ね、行こうよ！」

少し迷う。行ったことがない遠いところにも二人で行けるのだろうか。

でも、もうすぐおとなになるんだから、それくらいできなければ。それに一緒に行くのはアメフラシだ。困った時に頼りになるのはよく知っている。

「……うん、行く」

アメフラシの顔が、それは嬉しそうに綻んだ。がぼりと腕を広げたアメフラシが私に抱き付いてくる。

「やったー！ ウミウシちゃんと旅行行けるの、すごく嬉しい！」
アメフラシの動きに煽られてばらけそうになったしおりを抑える。

「私も。行き方調べてくれてありがとう」

手に取ったしおりの束を整え、筆箱を探って見つけたホチキスで綴じておく。制服のポケットに入るサイズで持ち歩きやすそうだ。

ページをめくり、気になっていた行き方の項目に目をさっと通す。船を使えば一晩で着くらしい。意外と簡単に行けるものなんだと知り、不安が軽くなった。

「じゃあ行こうか」

私にくっ付いていたアメフラシが離れて、ベッドに転がっていたリュックサックをいそいそと背負った。

「今から？」

私は驚いて声を上げた。同時に、アメフラシが私の荷物を増やした理由に納得がいった。

「夜の八時までに船が来る場所に行かないといけないんだ」

慌てて時計に目をやる。

「あと二時間ないじゃん！ どこに行けば……そう言えば先生になにか言わなくていいの？ 食べ物と着替えとあとなが」

「全部準備できてるから大丈夫。ほら、行こうよ」

ドアの前でこちらを振り向いたアメフラシは落ち着いていて、とても頼もしく見えた。小さい頃、一人で迷子になった私を迎えに来てくれたことを思い出す。私はアメフラシを信じることにし

た。

暗くなった敷地内を静かに抜ける。明かりが二つ、夜の中で踊る。こんな時間に外を出歩くのは新鮮で、あとの予定も相まって気持ち弾む。背負ったリュックサックは背中から少しはみ出るくらい大きい。中はほとんど衣服で見た目より重くない。

アメフラシのリュックサックは衣服に加えてなにか道具類も入っているようで、輪郭が少しごつごつしている。手提げ袋には大きな金具やロープが入っている。なにに使うのだろうか。

街灯もない暗い道をライトで照らしながら進む合間に聞いてみた。

「町外れに捨てられた箱に入って、それを船に引つ張らせるのに使うんだ。そうすれば交通費がかからないから」

「それ大丈夫なの？ 怒られない？」

「見つからなければ」

アメフラシは胸を反らして、自信満々に言った。

一抹の不安を覚えたが、他にいく方法なんて思いつくわけもない。

怒られたらどうしようと考えながら、疲れて会話が減るくらい歩く。岩に囲まれた細い道から開けた場所に出て、ようやくアメフラシの足が止まった。

「着いたよ」

ライトが、砂地にぼつんと転がる大きなコンテナを照らす。コンテナからは太いロープが何本も闇の中に伸びている。六面のうちの何か所は壊れてどこかへ行ってしまったのか、ぼつかりと開いた部分が上を向いている。大きさはアメフラシの背丈くらい

高さで、私たちと荷物でいっぱいになってしまいうくらいだ。

アメフラシは周囲を見回しながらコンテナに近付き、持ってきた金具を取り付けた。ロープの結び目をを確認したり始めた。「これどうやって持ってきたの？」

コンテナは金属でできているようで、とても一人で持ち運べるものではなさそうだった。

「もともとここに落ちてたんだよ。船には乗れないから、南に向かう船が通る航路で、船の代わりになるものがある場所を探して見つけた」

落とし物と聞いて中身が気になり、コンテナの中を覗いた。中にはこども用のヘルメットが二つと厚手の大きな布が数枚入っていた。どちらも使用感はあるが小綺麗なので、これはアメフラシが入れたものだろう。

「あと十五分くらいで船が来るから、ウミウシちゃんは先に入ってきて。ヘルメットを被って、コンテナが揺れても怪我をしないように壁を布とリュックで覆っておいて」

「分かった」

アメフラシは私がコンテナに入るのを見届けて、コンテナから伸びるロープを辿ってどこかへ行った。

私は布と自分のリュックサックだけでほとんど埋まったコンテナの中で、ああでもないこうでもないとして試行錯誤を始めた。やがて、波の音に雑音が混じり始める。雑音がだんだん近付いて、船の音だと気づく。

海を割る音がしつかり聞こえるようになった頃、アメフラシは戻ってきた。リュックサックを背負ったままアメフラシが残った

隙間に体を詰め込むと、苦しくはないが全身なにかしらと密着しているような窮屈さだ。アメフラシは体をよじってコンテナの開いた面を塞ぐようにリュックサックを金具で固定する。私とアメフラシの体でT字を作っているような配置だ。

「電気消すよ」

動きを止めて一息ついたアメフラシが、ライトを切った。私もそれにならう。真っ暗になると、ごうごうと水をかき混ぜる音が大きくなったように感じた。船がかなり近くまで来ている。

「揺れるから気を付けて」

轟音の隙間から拾い上げた言葉は布越しにくぐもっていた。

いくばくもなく、コンテナが傾いて激しく揺れた。思わず耳を塞ぐ。揺れはしばらく続いて、途中何度もガン、ゴン、とコンテナが壊れそうな程大きな衝撃を感じた。

必死に耳を塞いで、喉を締め付けられるような恐怖に耐える。

どれくらい経ったのか分からないが、連続で大きな衝撃があったあと、急に振動は収まった。

そろそろと耳から手を離すと、ぱっと明かるくなった。ほっとして強張っていた体から力が抜ける。

「どこかぶつかなかった？」

普段通りの声が入る。アメフラシは怖くなかったのだろうか。

「どこも・・・壊れるかと思った」

「頑丈なのを選んだし大丈夫だよ。多分着くまでに何度かまたぶつかるけど、眠れるなら寝ておいてね。明日は六時くらいに船から離れるから、五時半には起きて準備を始めるよ」

「どうやって船から離れるの？」

「船に引っかけたロープを外すだけ」

「私にもできない？」

「簡単そうな口ぶりだったので、私にもできるかと思いついてみる。アメフラシに頼りきりなのが心苦しい。」

「難しい結び方をしてるからぼくがやるよ。それよりも、今日はしっかり寝て船を離れたあとでぼくが仮眠する時に見張り役をしてくれない？」

「仮眠？ 今日寝ないの？」

「今日はぼくが見張り役。何かあった時すぐに対処できるようにね」

「分かった。明日は任せて」

感じていた無力感が頼られた嬉しさで薄れ、思ったよりも大きい5い声が出た。

「電気切るね」

「うん、おやすみ」

「おやすみ」

「暗闇に戻る。」

明日は頑張りうと決意を固め、目を閉じた。

頬が痛い。あと妙に暑い。

頭を動かすと頬を放された感触がした。つねられた？

重い瞼をこじ開けると、薄明るいライトの光が目に入る。

「起きた？」

「・・・おはよ」

あまり寝た気がしない。南に移動して温度が上がったようで、びったりしたインナーの中に熱がこもっている。屋外でこんなに暑さを感じるのは初めてのことだった。インナーを着崩している、布の向こうから語尾が溶けていて眠そうな声が聞こえた。「ウミウシちゃんのリュックに入ってる食べるもの出して。朝ごはん食べよう」

ぞもぞと体制を変えて、足元のリュックサックを探る。服を退けたその下から、腹持ちがよくて手軽に食べられるものが出てきた。適当に五・六個取り出す。

食べ物を分け合って無言で食べる。海をかき分ける音をなんとなくに意識する。工事現場にいるような騒音なのに昨日はずいぶんすんなり寝られたので、意外と自分は図太いのもかもしれない。

食べ終わってからすることもなく、六時まで中途半端に時間があった。自分のライトを点けてポケットに入っていたしおりを読むことにする。

行き方の章では世界地図に辿る道らしき線が一本だけ赤道まで引かれていて、その横に『一晩船で移動』『朝六時頃浅瀬に付いたら離船』『帰りは臨機応変』と書いてある。

持ち物の章では食べ物、着替え、サメ撃退グッズ、包帯、ライトなどが載っていた。アメフラシのリュックサックの中身は載っていないようだ。

後ろの方は応急処置の方法と、危険生物一覧になっている。危険生物は多すぎて覚えられないので、触らない、近寄らないのがよさそうだ。擬態して見つけ辛いものがあるから、サンゴ礁にも触らないようにする。

危険生物一覧の写真を眺めていると、前触れなく強い衝撃がコンテナを襲った。思わず悲鳴が飛び出る。

「うわっ！」

コンテナが固いなにかに当たったようだ。不規則に響く轟音と揺れが続く。出発する時に一度経験したので、今度は前よりも冷静でいられた。

揺れが継続的な振動に変わる頃、体が壁側に押し付けられる。直後に押し付けられる方向が垂直に変わった。コンテナが倒れたようだ。振動が収まり、船の轟音がゆっくり小さくなっていく。

「……アメフラシ？ 大丈夫？」

「うん。ウミウシちゃんも怪我してない？」

返ってきた反応に胸を撫で下ろす。

「へーき。もう外出れる？」

「ちよつと待ってね」

カチャカチャと金属がぶつかる小さな音。アメフラシの方から届くライトの光が弱くなった。

視界を遮る布を避けるとコンテナの外に立つアメフラシが見えた。

邪魔な布を入口から押し出すように退かして外に這い出る。腕を付いた地面から砂が舞い上がった。吸い込まないように急いで体を起こす。

コンテナの外は明るかった。見上げた空からキラキラと光が降り注ぎ、白い砂地に刻一刻と変化する複雑な模様を描いている。町の空と同じくらいの高さにあっても、この空を蓋のようだとは思えない。町よりも雪がかなりまばらで、遠くまで見通せる。

「アメフラシ！ ねえこれすごい！」

アメフラシが振り向く。いつもよりきらめく瞳と視線が絡む。

思わず抱き合って二人で歓声を上げた。

「こんなに綺麗だなんて思ってた！ ウミウシちゃん、教科書の写真の方の空も見に行こうよ」

「見たいけど……息はどうするの？」

「ここを空の外に出さなければ大丈夫」

アメフラシは着崩したセーラー服の胸元を下に引いて、鎖骨下の切れ目のような適応手術の痕を出した。

切れ目の奥には水の中で呼吸できない人類が、水上で呼吸する機能と引き換えに得た人工のエラがある。

アメフラシは背負っていたリュックサックを放り出して、空に向かって水を蹴った。私もそれに続く。

目線がぐんぐん高くなる。ヒレのように靡くセーラー服のスカート。鮮やかな色の魚。遠くにそびえる青い影。

空の一番明るいところを頭が突き抜ける。

目を細めて水上の空を見上げた。濃い青に、陰影のはっきりした白い模様。水中から見るよりも輪郭がはっきりして眩い太陽が目を焼く。

大昔のものだと思っていた写真の景色があった。

「雪が降ってない……」

水中では常に視界を漂っていた雪がひと欠片も見当たらない。

「水上ではデトリタスって言う雪のものが出来ないから、雪は寒くないと降らないんだって」

「寒い時だけ降るの？」

「うん。水上の雪は凍った水の粒で出来てるから、暖かいと溶けちゃうんだよ……ふあ」

アメフラシの欠伸で思い出す。まだアメフラシは仮眠をとっていない。

「アメフラシ、寝なきゃ！ 私ちゃんと見張りするから」

「そうだね、コンテナに戻ろう。今ならいい夢が見れそう」

手を繋いで一緒にとぶんと水に潜る。

見慣れた雪が舞う世界に戻ってきた。

一緒に沈みながら、アメフラシが思い出したように言った。

「人が水上に住んでいた頃は、水中の雪はマリンスノーって呼ばれてたんだよ」

牧場の朝
山中隆司

ニワトリが鳴き声と共に牧場の朝は始まる。

隣では仲間のカイ号がまだ眠っている。

のどの渴きを潤すために水道に向かうと友人のミマサカ号がいた。ミマサカ号が私に気が付いたらしく声をかけてきた。彼とは同年代だが私と異なり小柄な体格をしている。

「シモツケ号じゃないか。最近、寒くなってきたよな。寒くて夜なんて夜中に何度も目が覚めて、最近寝不足だよ」

「寒くて寝不足か。確かに最近、寒い。でもそれはミマサカ号君、君が一日中部屋の中で干し草を食べるだけの生活をしていたら、疲れがなくて眠れるものも眠れやしないよ。昼は外に出て散歩しないと疲れないし、部屋の中でジツとして食べて寝るだけの生活をしていたら退屈だろう」

「ああ、退屈さ」

「それなら、今度、一緒に外に出ようよ。いい気分転換になると思うんだ。最近、部屋の中で寝ているだけだろう」

「いや、寒いから外に出たくない。それに散歩と言っても近くにある塀の前に行くだけだろう。その先に広がる世界があるのは分かる。それを確かめる手段がないじゃないか」と叫ぶ。

「朝だぞ。静かに」とミマサカ号君をなだめる。

ミマサカ号君の言った言葉に何も言い返せなかった。確かにいつもの散歩はその塀まで行って帰ってくるそれだけだ。

塀の先に新しい世界が見える。だが、そこに行くことはかなわ

ない。

毎日、塀の先に世界が続いていることを確認するために散歩している。そして毎日、変わらない日常、景色が続いていることに安心する。

水を飲み、部屋に戻ると仲間のカイ号が朝食に干し芋を食べていた。ここ一週間食事が提供されてない。餌箱を見ると相変わらず私には朝食は準備されない。

食事を提供されないことをボヤいた友人を知っている。しばらくして、彼は人間に連れ去られていった。その後、彼を見ることはなかった。人間に強引に連れ去れる時の悲しそうな顔を一生忘れることはない。

今も瞼を閉じれば目の前にあの日の光景がやすやすと思い浮かぶ。今の私はこのような瞳をしているのだろう。

「兄貴は今日も食べないんですか。かれこれ一週間は何も食べてないですよ。体に障りますよ。空腹は気持ちも暗くしてしまいます。どうせ、人間がご飯を入れるのを忘れてるんですよ。今度、人間に言っつてやりますから安心してください」

「ありがとう。お願いするよ」

彼は私より少し後に生まれたが、体格はずいぶん小さい。いつも出された干し草や干しを目一杯頬張り、わらのベッドの上で寝るだけの生活をしている。毎日、満足に食事が提供され、暖かく眠れる環境のため永遠にここにいたいと言っている。

「そうは言っつてもな、ご飯が出されないんだよ、毎日。最近はなれてきて空腹も感じなくなつた」

「食べますか、コレ」と一束の干し草をこちらによこした。投げられた干し草はアスファルトの上にバラバラになって広がる。

「気持ちだけでもらっておくよ。本当に食欲がないんだ」

彼は不思議そうに私を見た。純朴な瞳を見てみると辛くなり視線を外す。外にはきれいな朝日が昇っている。

私は忌々しそうに干し草を踏みつけた。

人間の言いなりにはなりたくない。

だが、そう思う気力はすでになかった。

「私はこれから旅に出る。だからもう会うことはないだろう」

以前、人間にシモツケが連れ去られたのを目撃した。ここは肉牛の牧場であることを理解した。

このことはシモツケ号に話さないでいた。

真の動機、心の旅

天野満

だが、それはモチベーションではない。これは文章を書き始めたキツカケに過ぎないではないか。

「なんで俺、書き物やってんだろ？」

新年早々、執筆に行き詰っていたら、大変重要なことに気が付いてしまった。

自分が書き物をする理由が全く思い浮かばないのである。正確には、理由があるような気がするのだが、上手く説明出来ないのであった。

最近読んだ本の中に「目的を失った軍隊ほど脆いものはない」という旨のことが書いてあったのだが、同じように「動機の無い物書き」もまた脆いのではないか。

というわけで、私は「自分の心」という名の果てしない平原のどこかにあるという「真の動機」を探す旅にGoToすることになったのである。心の中でもクーポンが使えるのかどうかだけが不安だった。

・説その1 金がなかったから

私が小説やエッセイを書き出したのは、バンドを辞めたあとのことだった。当時、私は笑ってしまっただけ金を持っておらず、自販機の飲み物を買うことにさえ、躊躇する有様だった。

そこで、目をつけたのが、執筆業である。文章を書くのにはほとんど金がかからない。当時の私の如き貧民にはうってつけだったのである。

「俺は金がないから書き物をやっているのか」

・説その2 ちやほやされたい

バンドをやっていた頃、宣伝と趣味半分でブログを書いていたことがある。バンド仲間やお客さんから「ブログ面白い！」と言われると、調子に乗っていたのを思い出す。

承認欲求とは凄まじい原動力で、これもモチベーションになりうるのは間違いない。

「俺は、ちやほやされたくて書き物をやっているのか」

しかし、これも一番の動機では無いような気がする。部屋の中で一人、自分のためだけに楽器を弾くような、そんな感覚で文章を書いているときもあるからだ。

・説その3 下らない妄想のはけ口

私は四六時中、下らないことを考えている。

この間は「南極のサラリーマン」について考えていた。彼は氷原のど真ん中で、ペンギンやアザラシ相手に商売をしているのである。しかし、儲からないので、彼らを南極の外に連れ出して、彼ら自身を商売にすることにした。それが動物園の始まりである。という、愚にもつかないことを日がな一日考えていた。

このように、くだらない妄想ばかりしていると、頭の中に肝心の事柄を入れておくための容量が足りなくなってしまう。そこで、余分な妄想を書き物に移すことで脳の要領を確保しているのではないか、と思う。まるで、データを外部メモリに移すことでPC

のデータ保存容量を確保するが如く、だ。

「俺は下らない妄想のはけ口として、書き物をしているのか」

残念ながら、これもあくまで数ある理由の一部に過ぎず、モチベーションの根幹ではなさそうな気がする。必要に迫られてやっていることに過ぎないからだ。

・説その4 愚民でいることに嫌気がさした

大人になってからというものの、私は〈真面目〉とか〈いい子〉という言葉に懐疑的になった。それらの言葉を決して褒め言葉として受け取ってはいけない、と思っている。

大人たちが言うところの〈真面目〉や〈いい子〉というのは、実は「愚民」のことではないのか。

愚民。それは自分の頭で考えることをやめ、事なかれ主義に走り、極めて他責的に振る舞う人間どものことだ。

そして他ならぬ私も「愚民」である。

悲しいことに「いい子」は大人になると「言われたことしか出来ない人間」として周囲から蔑まれることになる。

逆に「悪い子」というのは、自分の頭で考える経験を大いにしすぎていたため、社会に出てから大人物に変化することもある。不条理とも思えるが、これが現実なのだ。

私は愚民である自分を恥じ「悪い子」になろうと考えた。その手段として「芸術」を選んでいたのである。勉強や仕事は「いい子」のイメージがぬぐえないのだ。

「俺は愚民でいることに嫌気がさして書き物をしているのか」
たしかに、反骨精神がモチベーションになるのは間違いないが、

やはりこれも決定打にはならない。他人が核になっている動機というものは、どうにも頼りない気がする。

ここまで書いても思い浮かばないのでは、いよいよ筆を折るときがきたのか。

と、覚悟を決めたとき、記憶の片隅から、あるエピソードが蘇ってきた。

ある日、大学時代の先輩と一緒にファミレスで食事をしていたときのことだ。

内容は覚えていないのだが、私は先輩の悩み相談に乗っていたのである。君の意見を聞かせてくれ、と言われて話した内容に、先輩は大層感激していた様子だった。

しかし、私はどうにも落ち着かなかった。私は本当に「自分の意見」を話していたのかわからなかったからである。実のところは「どこかで聞いたような話」をそれっぽく話していたにすぎないのではないかと。

私は自分の心中の違和感を先輩に伝えた。そして、次のような言葉をいただいたのである。

「お前は自分の意見をしっかりと持っている。でも、それを上手く言葉に出来ないだけだ」

ずっと、その言葉を待っていたような気がした。私の腑に、すことーん、と音を立てて落ちていく、その言葉を。

実のところ、私は泣いてしまったのである。心の中に抱えてきた、自分にも説明のつかないモヤモヤに形を与えることが出来たのが嬉しくて仕方なかった。

突然の私の涙に先輩は狼狽していた。ファミレスで突然涙を流す男は周りから見ればさぞ奇妙に映ったことだろう。私としても奇妙だった。相談を受けた側が救われるなんて話は聞いたことがない。

そうだよ、俺は伝えたいことがあるから、小説やエッセイを書くのではない。「自分が伝えたいことは何か」を知りたくて、あっている。「伝えたいことを伝えるための言葉」を探して文章を書いているんだよ。それがきつと美しいと信じているから、誰かに読んでももらいたいんだよ！

気がついたら、俺はパソコンの前で、涙を流していた。

俺はついに心の平原から「真の動機」を探し出したのである。クーボンは使えなかったけど、たどり着けたのである。

俺が悩んでいるのは当たり前のことだったのだ。書けなくて真っ白な原稿も、もう怖くない。

「原稿、真っ白だけど、このまま出しちゃっていいよね」
それはもちろん、いいわけがないのである。(了)

『十二支改め、一支物語』

ほろほろほろ

むか〜し昔、神様は動物たちにお触れを出しました。

『元日の朝、私の下へ挨拶に来るように。十二番目までに来たものを順に一年ずつ動物の大将にしてやろう』

牛は二番でした。本当は一番だったのに、ずる賢い鼠に利用されて二番目になっちゃったんです。それなのに私のご先祖様、顔色一つ変えずにつこり笑顔で許すんですよ。本当にあり得ない。

牛はゆったり穏やかな性格だと言われますが、それは違うと断言します。ゆったり穏やかお花畑なのは、鼠に騙されたご先祖様ただ一人。一族の誰一人として、二番であることを許した人はいませんでした。お陰で私たちの血筋は一族から爪弾きにされ、未だに本家からいびられる日々。

そんな苦しみが続くこと数千年。ついに、ついにこの生活に終止符が打たれる時が来るのです。

『同じ順番もそろそろ飽きたので、十二支を選びなおそうと思う。元日の朝、私の下へ挨拶に来るように』

神様からのお触れです。私は涙を堪えきれません。とうとう、長きにわたる憎しみを晴らす時が来たのですから。

全てはこの日の為。作戦も準備も済んでいます。

大晦日の夜、他の動物は皆床に就き、いびきをかき始めるでしょう。一方私は戸を開き、雪の世界へ足を降ろします。寒さに身を震えさせていると、背後から声を掛けられました。

「牛さんや、こんな時間にどこへ行くんだい？」

振り返ると、足元に鼠が一匹。思わず口許がニンマリとしてしまいます。

「神様と所ですよ。私は足が遅いので、もう出発しようかと」「そうかい、寒いがまあ、頑張れよ。おいらは日が出てから出発すっかな」

そうして鼠はどこかへ行き、私は歩き出します。

足が遅いから誰よりも早く出発する。その考え自体がご先祖様の失敗です。これは競争。血も涙もない勝負の世界。生き残るには誰よりも抜きんではなく、邪魔ものを蹴落とすのが正解なのです。それを今日、証明してみせましょう。

蹴落とすのは勿論、今私の背中にいる鼠……だけではありませぬ。虎も兎も龍も、蛇、馬、羊、猿、鶏、犬、猪も。全員神様の下へは辿り着かせません。決して。

「大変です！ 虎さん！ 起きてください！」

「うおお!? なんだなんだ!？」

突然大声で怒鳴られたかと思うと、そこにいたのは牛だった。

驚きすぎてあくびも出ねえ。こんな夜中に起こしやがってどうしてくれる、と一発どついでやりたかったが、血相を変えた牛の様子を見てそうも言っていられなかった。

「羊さんが大変なんです！ 助けてあげてください！ 足の速いあなたしか間に合わない！」

「た、大変ってなんだよ。詳しく聞かせろ」

「説明している暇はありません！ 行ってください！ さあ早く！」

牛に背中を押され急かされるまま、俺は考えなしに飛び出した。羊が大変だつてことらしいが、こんな夜中、しかも大晦日にどうしたつてんだ。

俺の足なら一刻と経たずに羊の家に着いた。明かりはついてない。家の戸を叩いても返事はなく、鍵も掛けられていなかった。

「おい羊、入るぞ」

返事はない。暗闇の中、俺は無意識に足音を忍ばせる。

「羊、どこだ。お前が大変だつて牛から聞いたんだが」

闇夜をひたすら忍び足で進む。変わらぬ返事はない。おかしい。何かが変だ。毛の一本いっぽんでそう感じ始めたとき、柔らかな何かを踏んだ気がした。

視線が下を向く。その光景に、俺は絶句した。

「ひ、羊……！」

そこには無残に毛を刈られ尽くされた羊の姿があった。丸い腹を上にして横たわり、白目を剥いて気絶している。

一体誰だ！ こんな酷いことをした奴は！

早く他の羊に知らせねば。思い立ち、振り返ったその時。

「お前！ ここで何をしている！」

別の羊がそこにいた。

良かった。早く状況を伝えて犯人をとつ捕まえてやる。そう思った矢先、羊は途端に悲鳴を上げた。

「虎のやつ！ 俺のせがれを丸坊主にしてやがる！」

「酷い！ きつとこのまま喰っちゃう気なのよ！」

「弟を正月料理にする算段だあ、お前許さねえ！」

「ま、待て！ 何か誤解してるぞお前たち！ よせ、来るな！ うわあああ」

虎、羊、脱落。

いやあ〜計画通り過ぎて笑ってしまいます。

とつても良い悲鳴でしたよ。思い出しただけで笑っちゃいます。肉食の虎には個人的に恨みもありましたし、本当に清々しい気分です。

それにしても、こうも簡単に事が運ぶとは思いませんでした。とはいえ、まだ脱落者は二匹だけ。さあ、次の犠牲者の下へ行きましょう。

「コケコッコォ〜、コケコッコォ〜」

「むにやむにや、うるさいなあ」

大きなあくびと共に目を開くと、飛び込んできたのはお日様の光、朝焼けの空、そして

「コケコッコォ〜！ 起きて！ 蛇さん！」

鶏さんが騒がしく朝の訪れを告げていました。

「ふああ〜、どしたの鶏さん。そんな騒ぎ立てて。それにどうしてここに？ いつからわたしたち隣で寝る仲間になったんですか？」

け？」

「寝ぼけたこと言ってる場合じゃありません！ 大変大変なんですよ！」

「大変って何がですか？」

「あたしたちですよ！」

コケコケ騒ぐ鶏さんをよそに軽く伸びをします。すると、しっぽの先に違和感を覚えると共に、

「あいだだだッ！ 引つ張らないで蛇さん！」

鶏さんがまたも大声を上げました。朝から迷惑な鳥類だこと、ため息をつきつつ、どうも圧迫感がするしつぽの先へ目を向けます。

わたしのしつぽは、あろうことか鶏さんのお尻の穴にはまっています。

……。

「いぎやあああー！ ばっちい！ ばっちいですっ！ 早く抜いてください！」

「いだだッ！ 痛い痛い痛い！ 暴れないで蛇さん！ あたしのお尻が悲惨なことになりますから！」

引いても引いても鶏さんが喚くばかり。いよいよ鶏さんのお尻が血を吹きそうというところで、わたしは力なく頷垂れました。

「うぐっ、全然抜けない。何かで完全に固められてるみたいです」「そのようですね。あいたたた……。とにかく、先ずお医者様のところへ行きましょう。こんなことした奴をすぐさま殴り倒してやりたいですが、この状況ではそうはいきません」

鶏さんの言う通り。この有様では堂々と表を歩けません。

「では行きましょう。太陽が昇りきる前に」

「ですが、そこでもう一つ問題があるので」

鶏さんは翼を広げます。それに促されるように周囲を見渡し、すと、見覚えのない風景が広がっています。固く黒い地面。聳え立つビルや電柱。そして行き交う人間の陰。

「ここ、下界……？」

そう理解した瞬間、わたしたちの前に大きな影が差し込みました。

「うおっ!? なんだこの生き物。鶏と、蛇？ が合体してるぞ。新種か!？」

「違う違う、コカトリスだ。中性ヨーロッパの怪物だよ」

「ええ！ 超特大スクープじゃん！」

人が人を呼び、騒ぎは更に大きくなつてわたしたちを覆いました。無数に群がる人影から嵐の如くフラッシュが焚かれます。わたしは堪らず駆けだしました。

「いや！ やめてください！ こんな姿を写真に撮らないで！ SNSにアップしないでください！」

「ちよ、蛇さん！ いたッ痛いって！ お尻抜けちゃうからあ！」

おやおや、下の方から可哀想な悲鳴が聞こえます。ええええ全く可哀想に。これで鶏と蛇も脱落です。

これに伴って、龍、犬、猿も脱落ですね。龍は親友の蛇がいなことに焦って神様に挨拶どころではありません。きつと草の根を分けて探してるはず。そして犬と猿、あの二人は年がら年

中喧嘩ばかり。仲裁役の鶏がいなければ喧嘩が終わることはありません。さて、残りも数匹だけ。私の勝利まであと少しです。

そよ風が長い耳の間をすり抜け、肩をブルブルと震わせる。醒めかけた意識を夢に沈めてもう一度眠ろうとするものの、一つ、また一つと風が吹き抜け、思わず寢床を飛び出した。

「ふわぁあ、何だよもう、まだ眠いつてのに」

あくびをしつつ東へ目を遣ると、眩しい朝焼けが広がっていた。

朝焼け、朝、今日は正月。全身の毛が逆立つようだった。

「しまった！早く神様んとこに挨拶に行かなきゃ！」

言うが早いのか、僕はぴよんぴよんと草原を走り出した。

普段は寝坊なんてしないのに、どうして今日に限って。必死に草原を蹴りながらふと思う。そう言えば、今朝は鶏の声を聞かなかった。いつもあれを目覚ましにしているから、それで寝坊したんだ。なるほどと胸の内を手を打つが、それと同時に、どうして鶏が鳴かなかったのかと疑問が残る。

そんなとき、ふと横目に見かけたのは馬の姿だった。馬は立ち止まり、首を垂れて何かを食べている。見ると、稲の束が大量に転がっており、それを夢中になってむしゃむしゃ食んでいた。

「おい馬。そんなところで道草食ってる場合じゃないだろ。神様に挨拶に行かなきゃ」

素通りするのも気が引けるので声を掛けてみる。が、返事はない。口を動かすことに夢中すぎて聞こえていないのか？

「馬！おい馬！はあ、相変わらずの食いしん坊だなお前は。いくら足が速いからって、このままじゃ挨拶に乗り遅れるぞ！」

最後の忠告とばかりに声を張り上げる。返事は勿論なし。もういい、馬は放っておこう。それより早く神様んとこ行かなきゃ。

気が逸り、ぴよんと一跳ね。それと同時にお腹が鳴った。思えば急いで家を飛び出したから朝ごはんを食べてなかった。何かないかと見回したところ、すぐ傍に人参が数本転がっていた。丁度いい、道すがら食べていくことにしよう。

それにしても、どうして人参が転がってたんだろう。馬が食べた稲の束もそうだ。誰かが運ぶ最中に落としたんだろうか。そんなことをふわふわ考えていると、どこからか地鳴りが聞こえた気がした。足を止め、耳を澄ましてみる。前、右、左、そして後ろ。振り向いた時、猛スピードでこちらに向かってくる何かが見えた。鼻息荒く、目をキラつかせ、殺意に満ちた巨体。

「お前もか、兎イ！俺の喰い物を盗みやがってエッ！」

「ひええええっ！」

本능が危険を察知し、気付けば走り出していた。必死に大地を蹴る。ぴよんぴよんぴよん。しかし猪との距離は広がらない。

「猪！お前が何に怒ってるか知らないけど、僕は何もしていない！何かの間違いだ！」

「間違いなものかアッ！お前の持つそれが動かぬ証拠！俺が丹精込めて育てた甘い人参！正月料理にするはずが、お前が盗んだんだろオッ！」

「えッ！？いや違う！拾ったんだそこで！盗んでなんかない！」

「聞く耳持たんッ！ 人參の代わりに貴様を食ってやるッ！」
じりじり、じりじりと猪との距離が縮まっていく。もうダメなのか？ 正月早々猪に殺されるのか？ 落ちていた人參を拾ったばかりに。

猪の鼻息がすぐ後ろまで迫ってきた。もうお終いだ、そう悟った僕は、最後に握りしめた人參を一口齧った。

この地鳴りが聞こえるということは、兎、馬、猪も脱落ですね。ふふ、うふふふ、あはははっ！ 遂にやりました！ 忌々しい敵は全て排除してやりましたよ！ これで心置きなく挨拶に行ける。勿論一番乗りです。ええ、念願悲願の一番です。

「神様、明けましておめでとーうございます」

お社に着き頭を垂れます。すると神様は長い顎ひげを撫でながら現れました。

「おや、一番乗りは牛か。ご苦労ご苦労。それにしても、日が出てしばらく経つが、他の動物が全く来んのお。あいつら新年早々寝坊でもしとるんか？」

いいえ神様。あの人たちは来たくても来れないのです。今頃全員、それはもう大変なことでしょう。しかしそれは仕方のないこと。私はそれ以上の辛い日々をこの数千年間過ごしてきたのですから。

「それにしても鼠も来んとはな。また悪知恵を働かせて、お前から一番乗りを奪うもんかと思つとつたがの」

「そういえば鼠さん、見てないですね。全く、何処で何をしているのやら……ふふ」

ん、ああ良く寝た。そろそろ牛のやつ、神様んここに着く頃だろう。牛が挨拶する前に、ちよちよつと一番乗りを搔つ攫うとするか。

つと、ん？ ……体が動かない！？ 縄で縛られてる！？ しかも目隠しと口枷まで！

状況が掴めずもがいていると、遠くからしゃがれた声が聞こえてくる。それが猫だと分かった瞬間、背筋がぞくりと震えた。

「にしても意外だなあ、牛があたしにご馳走をくれるなんて。牛と鼠、仲が悪いようには見えなかつたんだがね」

まずい、逃げなきゃ。必死に体をくねらせるが縄は一向に解けない。その内、静かな足音が近づいてきた。

「起きたかい、鼠。明けましておめでとーう。いや、今年はいいい年になりそうだな。だってそうだろう。とびきり美味しい正月料理を食べるんだからな」

その瞬間、腹に鋭い感覚を覚えた。おいらは成す術なく、ぎゅつと歯を食いしばった。

こうして世界は新年を迎えました。その後神様のもとへ現れた

動物はおらず、牛のみが動物の大將として選ばれたのです。それから向こう五千年間、丑年がずっと続きましたとさ。めでたしめでたし

蠟燭

かつていた町の姿はさほど変わらず、クリスマスを過ぎたケーキ屋さんの前に立っていただろうサンタクロース人形の姿はとうに消えている。その姿を最後に見たのは、もうずっと前の記憶になる。

年の瀬が近づき、肌寒い空気の中を歩く。最後にサチを見た公園の中に入る。いつも一緒に帰る待ち合わせの為に使っていた小さな公園。砂場と滑り台くらいしかなくて、いつ見ても殺風景だ。あの日の夜には粉雪が舞っていた。昼を過ぎて夕方近いこの時間の空は、太陽も出ていない曇り空で、雪でも降ってくれていれば、一段と思いい出に浸れたのかもしれない。

いつも一緒に座っていたベンチに腰掛けると、自然と頭の中には懐かしい思い出が蘇ってくる。煙草を出して啜る。あの頃と変わってしまったことは色々あるけれど、父さんの影響もあってこいつを吸うようになったこともその一つだろう。

煙を吐きながら座っていると、隣でサチがあどけない笑顔で笑っている気がした。二人の間には、よわよわしく燃えている蠟燭があって、暗がりにはらついていてる。サチが笑うと、焰も揺れる。焰が揺れると、なんだかなごむ。寒さを忘れてしまう。舞い落ちる粉雪は焰の中に吸い込まれるように消えてゆく。吐息が絶えず焰をおしている。

小学三年生だったサチは、あどけなく可愛らしい声で何かを言っていて、僕はあまり聞いていない。正直、頭はそれどころではなかった。その笑い声を聞くのは、今夜が最後になるのだと思

うと、クリスマスを過ぎた冬の寒さ以上にここはつめたくされたようで小さく痛んだ。サチはまだ、これからどうなるのか、しっかりとはわかっていなかっただろう。無邪気な笑い声は何も知らずに焰を揺らす。

「消えるよ」

からかうようにそう言うと、サチは面白がってまた笑う。

僕とサチの通っていた小学校は、その日が終業日であり、その夜から冬休みに入っていた。みんなが大好きなお正月休みはもうすぐそこにあつた。

雪が焰に消え、溶けた蠟の残骸が、その下の銀皿へと溜まっていく。残骸はまるで形を保っていない。次から次へと蠟が溶け、芯にまとわりつくように垂れていく。決して重力には逆らえず、下に落ちるしかない残骸は、粉雪が姿を変えただけのようにも見える。

「おにいちゃん、パパとママは？」

あの頃、僕たちは二人してこの公園に待ち合わせて、一緒に家に帰っていた。僕はクラスの用事があつて、決まって公園に着くのが遅くなる。だからサチはいつも公園で一人で待っている。砂場にいる時もあれば、ベンチに座って足をぶらぶらさせている時もある。滑り台にはそれほど興味がないようだった。僕が公園に入ってくるのを見た途端に笑顔になる。そんなことばかりだったから、その夜のように、学校帰りに日が暮れるまでずっと二人してそこで時間を過ごすなんてことはめつたになかった。

僕たちの両親が二人して離婚することになり、お互いがこれから別々の暮らしを始めるなんてことは、サチは知らなかった。知っ

たとしても、そうそう納得しないことは目に見えていた。サチは父さんも母さんも大好きだった。両親が迎えに来るのを待つ間、サチが持っていた蠟燭に火を点けて二人で温めあっていた。なぜかサチの手には蠟燭が握られていて、僕は眉をひそめた。ライターがなくて困り、近くのコンビニへ行った。火を点けるとどこか空気が変わったような気がした。あの時は、寒空の下で蠟燭の火に囲まれているってどんな兄妹だって感じにも思っただけで、あんな時だからなんだかとても暖かく感じてしまっていたとも思う。今だったら正直やりたくない。

この蠟燭、どこで手に入れたの？と訊いたら、サンタさんの大きなお人形さんを見ていたら、お店の人がくれたの、とサチは言った。火を点ける前によく見たら、学校帰りに通るケーキ屋さん、そういえばサンタの人形が突っ立っていたなと思いついた。確かに、その年のクリスマスは二日前に過ぎてしまっていたが、人形はそのままになっていた。その年はクリスマスが平日だったから、休日にお祝いを迎えるお客さんのことも考えてのことだったのだろうと思う。もしその日が別れの日でなくてなければ、クリスマスはうちも次の日に当たり前のようにやっていたのかもしれない。その日を見越して、当日にさらっとやったクリスマスだった。お店の人は、サチの向こう側にいるはずの、数少ないクリスマスのお得意様に向けてお店の蠟燭をアピールしたかったのかもしれない。

焔を眺めながら、二人して幾らかの時間を過ごして、夜の暗闇も濃くなり、蠟燭がそろそろ終わってしまうかな、と思い始めた頃、公園の入り口の方から足音が聞こえてきた。二つ。父さんと

母さんだった。二人して隣り合って歩いている姿を見るのなんて久しぶりだろうかと思ったものだ。

僕とサチと両親は、少しだけ言葉を交わして、それからふっと、サチが焔を吹き消した。焔の余韻を残して、あたりが少しだけ暗くなった。公園の薄い電灯のおかげで、三人の顔はうっすらとまだ見えた。父さんと母さんは浮かない顔で、サチは良く分からぬ顔をして。僕はサチの頭を撫でると、その小さな身体を抱きしめた。

サチは嬉しそうな顔をした。でもだんだんと、その顔に不安が射してくるようだった。母がそつとサチの肩に手を置いたけれど、サチは振り向こうとしない。父と母が再び言葉を交わしていた。それぞれがまるで今生最後の別れとでも言うようにお互いが背を向けて反対側に向かって歩き始め、どこか心許なげな目で僕を見つめているサチを見ながら、父親に手を取られて僕も歩いていく。僕とサチの目は最後まで外れることがなかった。公園を出て、サチの姿が見えなくなる最後の瞬間まで。

それが僕がサチを見た最後だった。それから大人になって、それからまもなく家もこの街を離れた僕は。サチはおろか、その頃仲の良かった友人の誰一人として再会することはなかった。文字通り、僕の人生はあの日一度リセットされたようなものだった。

けれど、サチのことは、ときたま頭をかすめている。クリスマスが近づいてくるような時期には特にだ。その時が近づいてくると決まっただけにか時限爆弾のような感じで、奇妙な心の傷口のようなものが痛み始める。血が滲み始める。完全に開いてどうしよ

うもなくなるなんてことはまずないのだけど。でも、そこに意識が向かずにはいられない。待ちかねたように血を出す傷口は、僕にその場所に行けと命令する。まったく無用なノスタルジアだ。第一、会ってどんな話をすればいいのかさえ分らない。二六歳になつたいま、十年以上も会っていない彼女と、どんな顔をすればよいというのだろうか。

けれども、その日、僕の携帯に父さんから一本の電話が入った。小学校の頃の同窓会があるそうだから行ってみたいらどうか。

いまさらあの町に戻ってどうしろっていうのだろうか。しかも中学校や高校の同窓会ならまだしも、小学校って。そんなふうの色々と減らず口は出て来たものの、僕の足はかつて過ぎた町に向かった。理由さえあれば、もう一度戻ってみたかったのだと思う。たぶん父さんは、あの日以来、口には出さずとも、僕がずっとサチの事を忘れなかったのは知っている。父さんと二人で暮らすようになってからも、買い物に行つて、おもちゃ売り場に行つたりすると、ゲーム売り場とかを覗く一方で、女の子向け商品の売り場にいたり、高校生の頃には、近所にいた、当時のサチくらの歳の女子中学生と仲良くしては、何かと世話を焼いていた姿も、父さんは忘れていないだろう。年頃の男子の純粋な女子に対する興味とは別のものをきくと感じていたと思うし、僕自身もそれを少なからず自覚していた。

久しぶりに帰郷して、町に着くと、僕の足は自然と公園に向かった。ただベンチに座って色んなことを思い出しても、仕方のない事だとは分かつてもいた。何かが変わる訳でもなくて、手持ち無沙汰に煙草を出して空を見上げる。

一通り思い出に浸つた後に、同窓会に行くと、見覚えのある友人と、そうでない友人の顔がごちゃ混ぜになつていて、僕は楽しんで笑いながらも、ここでは苦笑いを禁じえなかった。

よお、カズ、久しぶり。と、何人かが十年以上前に別れたきりの僕を見つけて声を掛けてくれた。会っていないなくても覚えてくれる人がいるというのは、嬉しい限りだ。

お店は昔からあつた居酒屋で、僕が卒業してからも、折あるごと集まっていたらしい。僕にはそれ自体初耳だったが、僕たちの歳の卒業生が、この居酒屋の息子だったというのが理由の一つなると、あの頃、僕の家は、色々とごたついている印象があつたのは周りも気づいていて、なかなか声を掛けづらかつたのだと思う。

僕はそうして彼らから自然と距離が離れて行つた。十年以上経つて再び僕の方に連絡が行つたのは、この中の一人が先日結婚をしたのがきっかけで、しかもその二人は、僕らと同じく同窓生同士で、中学時代に一度付き合つて、進学を機に別れて、また再会して、そんなよくありそうなドラマの果てに結ばれた二人だったようで、先日ようやく結ばれた二人をはじめとして、成人式を最後にもう会うこともなくなつていた我が同窓生たちは、再びの再会を果たし、集まろうと声を掛け合つたということだ。僕自身、成人式も別の場所まで上げてしまつていた事で、結局卒業以来一度もこの町には戻つてこなかつたのだけれど、今回はめでたい二人の祝福のおこぼれに与つたというわけだ。

それでも、どこか馴染みずらい空気を感じてしまいつつ、あの頃仲良くしていた旧友たちと飲み交わしていくうちに会は終わる

を迎えた。

店を出ると、外はすっかり夜だった。

サチと仲の良かったゆうきちゃんが僕に声を掛けてきた。彼女はサチとよく仲良くしてくれていた。

「カズ君。サチちゃんとは、もう会ってないんだよね」

僕が頷くと、ゆうきちゃんは残念そうな顔をして

「ほら、私たちって、サチちゃんが中学上がる頃に、離れちゃうでしょ。カズ君は遠くに引っ越しちゃったけど、私が中学に上がった頃にも、時々サチちゃんとは話したことがあったんだけど、高校に行ってから全然だね。カズ君とは卒業してから会ってないことは知ってるんだけど、気になって」

僕は、ありがとう、とだけ言った。ゆうきちゃんがその後に懐かしそうに言う。

「一回だけ。中学最後の年の年末かな。近所の公園で、クリスマススくらいにサチちゃんと会ったんだ。クリスマス！ってときにさ、私がちょうど彼氏に振られた後で、一人でとぼとぼ歩いてたら、公園のベンチに一人で座ってるサチちゃんを見つけ、私、思わず、仲間がいる！って思って声を掛けただよ。失礼な話だよ。サチちゃんは別に振られてもなんでもないという。あ、でもなんか蠟燭を持ってたんだよね」

ゆうきちゃんはその後も色々話しながら笑っていた。それから、ゆうきちゃんはサチとは会っていないようだった。あれからも、サチはクリスマスになると一人で蠟燭を灯していたことがあったのかもしれないと僕はどこかせつなくなつた。

なんとなく、足は再び公園に向かった。歩きながら、サチが一

人で蠟燭に火を灯している姿を浮かべてみる。その隣にいてやれなかったことが、僕がこれまで生きてきた中で、一番の心残りなのかもしれない。サチは別に死んでいる訳でもないのに。そうこうしているうちに空からは粉雪が舞い降りてくる。

公園に戻って、ベンチに座った。蠟燭、買ってこればよかったかなと思った。手元にそれが欲しくなった。仕方なく、ポケットから煙草とライターを取り出した。火が点かなかった。買って来ようかな。立ち上がろうとした時に、火、お貸ししましょうか？といつのまに近くに来たのか、コートを着た若い女性に声を掛けられた。再び彼女と一緒にベンチに座った。彼女がなぜか持っている蠟燭に火を灯すと、それを僕に向けてくる。どうぞ、と言われて、僕は蠟燭の火で煙草の火を点けた。

村田が眼球を意識し始めたのはいつだったか、はっきりと覚えてはいない。少なくとも中学生頃まで、人の目を見て話すことがどうしても出来なかった。部活の顧問からは、話をしていて人の目をちゃんと見ろ、とよく注意された。そう言われても、村田にとって相手の目を見据えるということは困難なことだった。一、三秒見つめると、胸の奥がつかえるような苦しさを感じて目線を下げてしまうのだ。なんとか正面を見て人と会話出来るようになったのは、村田が高校を卒業してからだった。その頃になると、自分の恐怖心が人の瞳孔とアーモンド状に切り取られた目の輪郭にあるのだと気付き始めた。村田は人と目を合わせる時、輪郭の中にある目ではなく眼球自体に意識を向けるよう心掛けた。眼球は脳から伸びた視神経にぶらさがるビー玉の様なものだ。眼球のイメージを持つことにより、村田はかろうじて相手の目を見て会話することが出来るようになった。

これもいつからかはっきりとは覚えていない。村田は他人の眼球を観察する癖がついていた。通りすがりの人の横顔を見るたび、彼らの眼球がどうなっているだろうかと思像した。駅のホームや買い物中など、不意に目が合ってしまった怪訝な顔をされることもあった。気まずい思いをすることもしばしばあった。あれほど他人と目を合わせることが苦手だったのに、眼の観察だけは止められなかった。視線へのトラウマが、村田の中の探求心をより一層大きくしていった。

大学を出て給料を稼ぐようになってから、村田はキャバクラに通うようになった。会社の先輩の誘いで付いていったのがきっかけだ。彼女たちは、村田がどれだけ目を見つめても文句を言わなかった。目を見るのが好きなのね、とよく聞かれた。見つめ返されると、村田は動悸で息が苦しくなった。異性としての胸の高鳴りではなく、潜在的な目への恐怖だった。この「目」を克服しなくてはならない。村田は勝手に思い込んでいた。君の目が綺麗だからだよ。決まって村田は答えた。そう言いつつ、内心では眼球の全体像を探った。アーモンド形にくりぬかれた目が表層的な言葉や感情だとしたら、眼球は人間という生物そのものだった。

時に意識的に、ある時は無意識に、村田は他人の眼球を想像したが、実物の眼球を見たことはなかった。初めて村田が眼球をその手にとったのは三十歳になってからだ。それは人間のものではなく、牛の眼球だった。

村田が眼球と出会ったのは牛の屠殺場だった。眼球を求めて訪ねたわけではなく、そこが村田の転職先だった。

令和二年の年の暮れ、村田は無職で三十歳の誕生日を迎えた。後先考えず仕事を辞めてしまい、三ヶ月が過ぎていた。人間関係が原因だったが、本当に辞めてしまうほどのことだったのか村田自身にも分からない。

新卒から数えて、村田はそれまでに四つの会社に勤めた。全く向いていない仕事もあれば、続けようと思えば続けられた仕事もあった。四つ目の職場は後者の方だ。聞いたこともない、マイナー

なカップ麺メーカーの営業だった。村田は、その会社に三年勤めた。三年というのは、それまでで一番長い勤続期間だった。それでも一年が過ぎた頃から、漠然と辞めることを頭の片隅に置いていた。決定的な何かがあったわけではない。澱のように積もったわだかまりがある日どうしようもなく耐えきれなくなり、村田は辞表を出した。

仕事を辞めて一ヶ月は、ただ毎日映画を観て、貯金も無いのに数日置きにキャバクラに行った。二ヶ月が経った頃から漠然とした焦燥に駆られ、ハローワークに通い始めた。三回の転職活動と比べ、四回目は困難を極めた。コロナウイルスのせいか、思っていたより求人の方が少なかった。希望する求人の面接を幾つか面談で提示したが、アポイントの時点で断られた。ハローワークの職員には、過去の職歴が良くないから一つ会社を減らして書くように言われた。一刻も早く働き口が欲しかった。いつそ、人が嫌がる求人の方が都合が良いと思い始めていた。食肉加工場、未経験者歓迎、という求人を読んだ時、業務の内容はおおよそ想像がついた。屠殺業の求人だ。三年前だったら応募すらしなかっただろう。

結局、村田はその会社に応募することにした。ハローワークから電話をかけると、武骨な雰囲気の声が聞こえた。求人を見た、と伝えると特に何も聞かれず、私服で良いから明日面接に来るよ、と言われた。

次の日、履歴書を持って面接に向かった。

指定された事務所に着くと、面接もそこに、社用車の白いバンに乗るよう言われた。運転手が昨日の電話に出た採用担当らしい。多分五十歳前後、ダルマの様な体系をした男だった。名前は西岡と言った。道中で西岡に、血は大丈夫か、とだけ聞かれた。血が大丈夫なら採用されるんだろうな、と村田はぼんやり思った。作業場に入る前に、帽子とマスク、白いエプロン、ゴム手袋と肘まである青色のビニールを着けた。後の工程から順に見学するらしい。最初に見たのは、吊り下げられた大きな肉塊だった。数えてみると十頭分だった。テレビなどでよく見たことがあるやつだ。吊られている牛の他に、パレットに乗せられた解体済みの肉塊があった。スーパーで売ってるブロック肉と大して変わらない。

何故、最後の工程から見ると、全部見る前に帰っちゃう人が多いいから」

村田は西岡の目を見た。眼球ではなく、瞼や目尻に現れる表情の機微を探ったが、そこから何か特別な感情を読み解くことは出来なかった。西岡の視線がじろりと自分に向くと、村田は動悸が激しくなった。しかし、その視線は何か意図を含んだものではなかったようで、再び作業場に向けられた。

最初に見た肉塊は、枝肉という状態なのだと説明された。

生きている牛が枝肉になるまで、大体四十分だそうだ。牛はほとんどが解体される前日に搬入され、係留場と呼ばれる敷地に待機させる。屠殺が行われる部屋は、係留場からは見えない。係留場から屠殺場までには細い一本道があり、業務の最初、その一本道に牛を並ばせ一頭ずつ屠殺場に誘導する。その先の個室には、

ノッキングガンと呼ばれる屠殺専用の銃があり、鉄芯で牛の眉間を打ち脳震盪を起こさせる。そうやって気絶させた牛の喉をナイフで裂き、血抜きをする。この時、内容物が逆流しないように、食道と肛門に栓をする。以前、このセクションから見学をさせた応募者は、耐えきれず嘔吐して医務室に運ばれたことがあったそうだ。

その後、牛にチェーンをかけて釣りあげ、脚部の切断と皮剥きを行う。作業員は脇の通路に何本も牛刀を並べ、とつかえひつかえしながら恐ろしいスピードで刃をふるっていた。

皮を剥いたら臓物を摘出する。臓物と皮は別の会社が管理しているらしく、内臓の取り分けは覚えなくて良いと言われた。肉のみになった牛を、更に電動のこぎりで背中から割っていく。こうして背割きした肉から、毛や汚れを除去したものが、最初に見せられた枝肉になる。

村田が見学を終えて事務所に帰ってくると、西岡に君は採用だと告げられ作業着を渡された。次の日から作業場に直接出勤するように言われ、契約書を書いた。村田が事務所を出ると、既に日が暮れていた。久しぶりに他人の視線に晒され、身体が重かった。それでも前の会社の様に、毎日アポイントメントをとって営業に向かうよりは良さそうだった。作業員は誰も目を合わせることなく、ひたすら作業に集中しているように見えた。

屠殺場の臭いと血による熱気は強烈だったが、多分耐えられるだろうと村田は思った。それより、ノッキングガンを打たれる直前の牛の表情を思い出した。表情というより、その眼球だ。村田は牛と目があった。少し離れたところからの見学だったが、大き

な黒目の周りの白目が見え、押し出されそうなほど眼球に力が入っているのが伝わってきた。

後で西岡に言われた。

「あんまり、牛と目を合わせちゃあかん。君はちゃんと顔を見て話してくれるし、それはとても良いことなんだが、牛と目を合わせるのはあんまり良いことじゃないぞ」

そうか、自分は顔を見て話せていたのか、と村田は思った。安堵と共に、あの牛の目を思い出した。死への恐怖、怒り、そういったものがまざまざと伝わってきた。決して自分の良い経験ではなかった。生命が奪われる瞬間、流石に慄いた。しかし、人間と目が合うのとはだいぶ違った感じがした。なにより、あの巨大な眼球だ。生物としての眼球の美しさに村田は惹かれていた。

屠殺場勤務の初日、村田は牛の眼を手に入れた。本当は眼球そのものが欲しかった。実際手に入れたのは、眼の中にある水晶体だった。

初日は面接の時と同じで、ほとんど見学だけだった。定刻十七時の鐘が鳴る。皆が帰り支度し始めたのを見計らって、村田はクリーンゾーンと呼ばれる肉の加工場に忍び込んだ。

クリーンゾーンとは主に肉と内臓を仕分け解体する場所のことだと教わった。その前段階、牛を失神させて喉を裂き、皮を剥ぐ場所がダーティゾーン。牛を失神させてから喉を裂くのがダーティゾーン。吊るされた首を切断するのはクリーンゾーンだったはずだ。村田は牛の頭部を探していた。正確に言うと、頭部では

なく眼球を探していた。

廃棄ボックスと書かれたコンテナに、頭部はすべて放り込まれていた。牛は棄てるところが少ない畜産動物らしいが、頭部だけはBSE検査の後に焼却処分される。

村田はコンテナによじ登り、その中の一つを持ち上げた。身体全体で力ませ、両手で抱えてやっとなつと頭の一つを取り出すことが出来た。改めて牛の目を見た。先ほどまで黒く澄んでいた瞳が、白濁しつつあった。村田は傍らに並べられた牛刀を手に取り、眼球の周囲の肉を切り取った。頭部から切り取った牛の眼球は、思いの外ぶよぶよとした醜い塊だった。厚手の保護手袋の上で、ゼラチン質の眼がべったりと広がった。五百円玉ほどもある瞳孔を覗き込んでみても、目が合うことは無かった。やや青みがかったそれは、ほ乳類というよりも巨大な深海イカを思わせた。

「お前、なにやっとなんじゃ」

背後から声がした。川崎という年配の作業員だった。怒気を含んだ視線を向けられた。唐突な罵声に、村田は思わず目を伏せた。

「お前、新入りだったか」

「はい、今日からです。村田と言います」

「ボックス漁って、一人で何してたんだけ」

村田は足元の頭部と、潰れかけた眼球を見た。危ない人間だと思われたら、初日から首になるかもしれない。いっそ、辻褄を合わせつつ、本当のことを話した方が良くと村田は判断した。

「牛の眼が欲しかったんです」

昔、理科の実験で解剖した時に興味がわいて、と付け加え牛刀を川崎に渡した。川崎は、その持ち手から刃先まで舐めるように見た。

「刃が欠けたら仕事ならんからな。教えられてないのに触っちゃいかんぞ」

川崎は、眼の肉片を拾い上げた。こんなのが欲しいなんて、変な奴だな、と目の端で笑った。いえ、そうじゃなくて、と村田は頭を振った。こんな、カエルの卵の様な塊が欲しかったわけではない。

「その牛の眼玉、中身がどうなっているか見たいのですが」

余計なことを言ってしまった、と村田は一瞬後悔した。しかし、川崎は黙って眼球を作業台の上に置いた。川崎は牛刀を握り直し、表面の皮を引くように二つに割いた。どろりとした半透明の中身が飛び出す。内側を彩る網膜は、翡翠のように深い緑色をしている。村田は、牛刀に集中する川崎の眼を観察した。初老の男性特有の、皺に埋もれた深い目をしていて。同時に、今まで見たことが無い妙な光彩をしていた。

「失礼ですけど、川崎さんの右目、義眼ですか」

また余計なことを言ってしまった、と村田は唇を噛んだ。余計かもしれない言葉は一度飲みこんでおくぐらいが丁度良い。今までの職場でも散々学んできたはずのことだ。

しかし、川崎は何でもないことのように答えた。

「よう気付いたな、初対面の奴に言われたのは初めてだよ」

そう言って自分の右目を指さした。水晶みたいで綺麗やろ。そう言って笑った。

肉片の後処理をどうして良いか分からず、村田は川崎がするのとをただ横で見ていた。眼球からこぼれ落ちた漿液をふき取りながら、川崎はビー玉状の粒を摘まみ上げた。

「これが牛の眼玉の水晶体だ」

欲しいんだろ、と村田の掌の上に粒を置いた。眼球全体の生々しさとうって変わり、それはまさに水晶のようだった。

「西岡には黙つとき。あいつ、管理には厳しいから」

改めて、川崎の横顔を観察した。最初の怒気は完全に消えていた。義眼だという右目も、よく観なければ他人には区別がつかないだろう。ただ、村田が漠然と恐怖してきた視線が川崎の右目には無かった。焦点の合わない瞳には、一種美しささえ感じられた。

村田は牛の水晶体を胸ポケットに入れて、作業場を後にした。更衣室を出ると、川崎が先に着替えて待っていた。作業場は熱気に満ちていたが、外は寒空だった。川崎は無言で自販機の前に立ち、缶コーヒーを二本買った。甘いのか苦いのか、どっちが良いかと村田に尋ねた。村田は、甘い方の缶を受け取った。

「こうゆう仕事やから、色んなこと言う奴がおるよ。でも、必要以上に他人の目を気にしたらやっつけていけないし、そもそも、本当に相手が考へてることなんて分かりやしないんだ。世の中分からないことだらけさ」

川崎は独り言のようによく喋った。

自販機の薄ぼんやりとした明かりのみが二人を照らした。見渡すと、この作業場の周囲はまばらに街灯があるだけで、店や工場の類は少なく、田畑のみが広がっていた。

何故義眼になったのか聞きそうになったが、村田は押しとどめ

た。それ以上何か会話をすることもなく、並んで缶コーヒーを飲んだ。二人の息だけが白く長く宙に伸びた。

その時、村田は不意に気付いた。今まで村田が恐れてきたもの、それは突き詰めると他人から自分に向けられる感情だ。更に言うと、その感情があまりに不明慮であることが恐ろしかった。そうか、分らないことが恐ろしかったのか。それじゃまるで幽霊を恐れるのと同じじゃないか。目は感情の影法師の様なものだ。見つめれば見つめるほど輪郭は歪み、ぼやけていく。

胸ポケットの中にある水晶体を指で摘まみ、取り出す。水晶体は自販機の明かりを受け、柔らかく光を屈折させた。水晶体は眼球の一部に過ぎなかったが、川崎の義眼とどこか似ていた。もしかしたら、川崎の義眼は水晶で出来ているのかもしれない。水晶の眼を埋め込まれた川崎となら、村田は視線を交わしても平気でいられるだろうか。そんな想像を巡らせて、川崎の眼球をイメージしようとしたが、その像が出来上がる前に川崎が村田の肩をポンと叩いた。

「帰るか」

村田は頷いた。急に身体に触られるのは苦手な方だったが、不思議と嫌ではなかった。

去り際、明日から頑張れ、なんとか続けられるように、と川崎は村田に呼び掛けてきた。きつと、続けられる人間の方が少ないのだろう。村田も今までのことを考えると、どれだけ続けられるか自分でも分からない。とにかく、明日から改めて新しい仕事が始まる。牛を切り刻み、肉にする。毎日他社に営業に行くよりはマシかもしれない。けれど、実際仕事をしてみてどうなるか、向

いているのか向いていないのか想像もつかなかった。世の中は分らないことばかり、という川崎の言葉を頭の中で反芻してみた。

胸ポケットに手を当てると、水晶体の丸い感触が確かにある。眼球の柔らかさに比べ、水晶体は指で押ししても潰れないだけの硬さを保っていた。川崎の義眼はどうなのだろうか。柔らかいのか、それとも水晶の様に硬いのか。いつか、あの義眼を手にとって触れてみたい。夕闇に去っていく川崎の背を見ながら、村田はそんなことをふと思った。

△了▽

壊れ

氷川省吾

缶詰

私は食べ物に関して、珍しい物を見つけたらひとまず挑戦することになっている。

そのために、新製品や見慣れない味の食べ物を見つければ買って食べてみる。外食に行くときはチェーン店ではなくローカルで個性がある店を探す。輸入物の置いてあるスーパーを物色することは習慣になっている。

そんな私が一つだけ手を出していない物があつた。スウェーデンで作られるニシンの塩漬けの缶詰。シュールストレミング。

殺菌しないために缶の中で発酵が進み続け、様々な腐敗の臭い成分が狭い空間に閉じ込められることで生じる臭いは、「世界で最も臭い食べ物」としてギネス記録になるレベルまで高まる。人間が感じる臭いを数値化すると、納豆が452、焼き立てのくきやが1267のところ、シュールストレミングは8070にもなり、もはや食べ物どころかこの世の物とは思えない域に達する。

だが何をとち狂ったのか、友人の一人がそれを手に入れてしまった。なにやら非常に安い物を偶然見つけて、ついつい買ってしまったらしい。売られていた最後の一個で、値段も他の数分の一しかなかったそうだ。ノリが軽い男なので、深く考えずに買ってしまつたらしい。冗談抜きで破裂する危険があるために放っておくことも出来ず、仕方がないので他の友人にも何人か声をかけ

て、全員で消費することにした。地獄に道連れだ。

結局、友人の実家の裏山の空き地で開けることにした。ここなら悪臭で警察を呼ばれることがないし、危険物を埋めても文句は言われない。念のため、使い捨てに出来る（燃やしても有毒物質が出ないらしい）カップとゴム手袋を用意しておいた。食べ方もリサーチして、付け合わせに大量の玉ねぎやらジャガイモ、トマト、クラッカーと、ウォッカとアクアビットを4本用意する。強い酒を用意したのは、臭み消し以外に、食べきれなかったときに焼いて始末する燃料の意味もある。

さて決行の日、予定通り集まつた私たちはまるでこれから毒ガス汚染地帯に入ろうとするかのように、服の上からカップを着て、手袋を装備して、隙間をガムテープでふさいだ。問題は誰が最初の犠牲者——つまりは開封する役になるかだったが、ジャンケンで私になつてしまった。

空けた時に中身がガスで噴き出して飛び散るのを防ぐため、水の中で開けた方がいいらしい。そこでバケツに水を貯め、問題の元凶である友人が懐中電灯で私の手元を照らすなかで、私は水中で缶に缶切りの刃を突き刺した。

その瞬間、ピンクとも何とも言えないドロツとした物があふれ出し、出てきたガスが気泡になつて上つてきた。水面に出るはじけた時に私の嗅覚を襲つたのは、もはや人間が表現できるレベルを超えた、物理的な威力さえ伴つた「臭い」だった。懐中電灯を持っていた友人はつぶれたカエルのような声をたてて顔を背け、私も鼻を通じて脳を殴りつけてきた臭いに意識が遠きかけた。胃の中身が逆流しそうになつたものの、何とかこらえて缶切りで缶の蓋

壊れ

を切り裂き続けた。

友人はこちらを懐中電灯を照らすどころではなく、腰を折ってえずいている。お前が買ってきたんだから、せめてちゃんと照らせと思うが、流れ出てくる内容物で水が濁り、私の方も臭気で目に涙が滲んでいるせいでよく見えない。もうここまでくればヤケクソだと、缶切りをゴコゴコやり続け、どうにか蓋が開けられそうなところまで切り開いた。

その時、蓋が内側から押されるような感触があった。中身がこぼれ出そうなのだと思うって缶を上に向けて軽く蓋を押さえたが、内側から蓋を推す力はさらに強く、何かが中で“動く”感触がした。

あれ？と感じる間もなく蓋が内側から開かれ、できた隙間から“何か”が出てきた。ニシンの半身ぐらいの大きさで、濁った水の中では暗い色をしているように見えた。それがビニールの手袋越しに私の手に触れると、両生類の肌のような、ぐにやりとした嫌な感触が走った。

そいつが水中にいたのは一瞬で、すぐにバケツの内側を這い上がり、外に出てどこかに消えた。下生えが鳴る音がただけで、後には何も残らなかった。懐中電灯の光が明後日の方向を向いていたせいで、出てきた“もの”の姿はわからないままだった。

懐中電灯役の友人が立ち直り、私は開封“された”缶を引き上げた。中には半ばとろけたようになったニシンの切り身が入っており、腐った残飯にしか見えなかった。

試食の結果、全員が“最悪”の感想しか言えなかった。付け合わせを全部消費し、アルコールを2瓶空にして、ようやく食べることができた。2人が耐えられなくなって吐き戻したので、食

べきつたと言えたかどうかは怪しいが。

幸いなのは中身が予想よりもはるかに少なかったことだろう。発酵が進みすぎると、魚の身が本当に液化してしまいうらしい。ほとんどが溶けてしまっていたので、水の中で開けたときに流れ出てしまったのだという結論になった。

でも、私は知っている。中身は“あれ”が食べてしまったのだと。あれがどんな形で缶に入ったのかは知らないが、大きくなる前に一緒に食べてしまったらどうなったのだろうか？

缶を買ってきた友人は、世の中なんでも経験だと言うが、しない方がいいこともあるという格言めいたものを残した。私もそれには同意している。少なくとも、わけのわからん怪しい缶詰を食べるのはやめておいた方がいいかもしれない。

プレゼント

私は大学のころから鳥の写真を撮ることを続けている。お気に入りの鳥の一つはモズだ。

モズの体格はスズメよりも少し大きいぐらいだが、昆虫のみならずトカゲやネズミ、スズメなど他の鳥まで捕食するブレデターとして知られている。丸っこい体型とつぶらな黒い瞳に、獲物を捕らえる長い鉤爪と、肉を食いちぎる鋭く曲がったくちばしを持つ。そして、捕った獲物を木の枝などに串刺しにする早贄という習性があり、私の近所でも小枝の先や有刺鉄線に突き刺さった虫やネズミ、スズメの死体を見ることがある。

かわいらしい見た目をした饕餮な捕食者というアンバランスさが、私にとってなんとも魅力的に映る。

私の家の近く、いつも買い物に行くときに通る道の横に小さな神社があり、一羽のオスのモズがそこを縄張りになっている。近くを通ると、梅の木にとまってあたりを見張っている姿や、生け垣に串刺しにされた小動物を見ることがある。

そして初春のころになると、モズの繁殖期が始まる。鳥のオスはいろいろな方法でメスの気を引こうと努力するが、モズも例にもれずアピールに精を出す。漢字で書くと百舌鳥という時になる通り、他の鳥の鳴きまねをし、ダンスもし、『求愛給餌』もする。カワセミやアジサシもやる行動で、つまりはオスがメスに食べ物プレゼントして気を引くのだ。人間ならアクセサリーや服、カワセミやアジサシなら魚、モズなら虫や小動物になる。

近所に住んでいるオスも、毎年その季節になると女の子をひっ

かけようと頑張る。こいつは優秀なハンターで、早贄の獲物がいつでも用意されている。早贄は繁殖期のオスの栄養補給に使われるらしく、早贄している獲物の数が多いオスは鳴き声が良くなつてモテるという。健康で歌がうまく、ご飯をいつも用意できる甲斐性のある男がモテるのは、どんな動物でも同じだ。

そのため、このオスは毎年メスに不自由しないようだ。1シーズンで3回も別のメスにプレゼントしているのを見たこともある。

この前の年も、例のモズが女の子にプレゼントしている様子を見かけた。桜の木の枝で、目の周りに黒い筋が走っているオスが、色が薄いメスに食べ物を差し出している。プレゼントは大きな芋虫で、人間の指が指ぐらいはありそうに見えた。こんな季節にどうやって見つけたのかは知らないが、それができるからモテるのだろう。メスは喜んで受け取り、落ち着いたところで食べるためか、どこかへ持ち去っていった。

次の日にも、同じ場所でオスがプレゼントを差し出していた。今回は何か平べったい物だった。白っぽい色をしていて、大きさは人の耳ぐらいだろうか。ガかとも思ったが、この季節にあんな大きなガがいるはずがない。枯葉ではプレゼントにはならないし……。気になったが、下手に近づくと逃げられるし、いいところを邪魔するほど野暮でもない。その日もメスが受け取って飛び去ったのだけ確認し、私は買い物へ行つた。

2日後。用事の帰りに神社の横を通ると、例の桜の木にメスが止まっていた。しばらく待っていると、思った通り獲物を啜えたオスが馳せ参じた。今回は最初に見たときと同じような芋虫だっ

た。コガネムシの幼虫か何かなのかもしれないが、やはり立派な獲物を持つてくる。メスは喜んで（少なくともそう見えた）受け取ったが、その時に芋虫から何かポロリと落ちたのが見えた。

モズがいなくなると、私は桜の木の下に行って落ちた物を探してみた。それらしいものは見つからなかったが、代わりに指輪が見つかった。ダイヤがあしらわれている女物だ。モズのデート現場の下で人間用のプロポーズ道具になりそうなものが見つかるのは面白い。明らかに高価なものだったので、交番に行つて届けておいた。交番の壁には指名手配犯や行方不明者の人の写真や似顔絵が貼つてある。行方不明者の一人は近所の人のようだ。

次の日から、モズのプロポーズの様子を写真に収めてやろうと思つてカメラを持ち歩くことにし、ようやく桜の木の枝でプレゼントを渡す現場に行き会つた。今度のプレゼントは何やら見慣れない物だった。何か丸いもので、大きさは10円玉ぐらいだろうか。上に短い糸かひものようなものが付いており、オスはその部分を啜えて持っている。差し出されたメスは少し逡巡したが、ひもを啜えて受け取つた。

私はいぶかりながらカメラを構えてズームした。メスが後ろを向いたせいでよくわからず、すぐに飛び去つてしまったためにはつきりと見えなかった。ただ、一瞬だけ見えたそれは白い球で、ひもは赤黒い色をしていた。そして、底の方——ひもがついているのとは反対側——は黒かった。

それから何度か神社の横を通つたが、例のメスへの貢ぎ物は終わったようで、しばらくはオスしか見ることはなくなった。また別のメスが現れるようになったが、今度のプレゼントは小さな地

虫やシャクトリムシなどの普通の物になっていた。

別の用事で指輪を届けた交番に行ったとき、近所で行方不明になつていた女性の写真がなくなつてゐるのに気付いた。

相手が鳥であっても、あまり他者の恋路を詮索するのは止めておくほうがいいということだろう。

カビ

ついていないときには、追加でついていないことが起きる。マーフィーの法則ではないが、私は確実にそうだと言える機会に逢ったことがある。

あれは大学院生1年目の夏休みだった。その時は私は実家に帰っていたが、用事があって大学まで行くことになった。予想以上に時間がかかってしまったために出るのが夕方になってしまい、疲れていたのもあって今日は部屋に泊まって明日帰ることにした。帰省する前に掃除して、生ものや賞味期限が近いものはすべて消費していたので、近くのコンビニで適当な物を買って部屋へと向かった。

そうして部屋のドアを開けた瞬間に私は異様に気づいた。ものすごい湿度だった。まるでサウナか温室に入った時のような。後で知ったのだが、3日前に真上の部屋でひどい漏水があったのだ。そのせいで、真下にあった私の部屋は湿度100%の環境になっていた。

密閉された部屋が、真夏に超高湿度になって3日も放置されれば、何が起るかは誰でもわかる。私の部屋は冗談抜きで腐海になっていた。

ありとあらゆる物の上にカビが繁殖していた。寝具、水回り、歯ブラシ、食器、衣服。ほんのわずかでも栄養源となる有機物が付着していた物は、全てカビのベッドになっていた。その時の様子は、今でも思い出すたびに憂鬱になる。ドアを開けたら、そこは腐海でした。映画にするなら最悪の展開だ。

ドアを開ける瞬間まで抱いていた、疲れたとか何時ごろに買ったものを食べようとか言う思いは一瞬で消し飛び、パニックになりかけた。それでも何とか状況を把握し、カビに侵された物を捨て、表面の有機物に繁殖しただけの物はふき取り、何とか部屋を（表面的には）正常な状態に戻した。発見が比較的早かったことが幸いしたのか、それとも浸食されやすいものが少なかったからなのか、カビが深く食い込んで取れなくなっていたものはない。布団のシーツはダメになったが、中身は無事だったのは意外だった。

カビの生命力というか繁殖力はすさまじい。ゲームのコントローラーやカメラにも指の形にカビがついていたのには仰天した。それらを持った時についた手垢やわずかな皮脂を栄養にしてカビが育つたのだ。冷蔵庫の取っ手やベッドの近くの壁紙にもカビの手形がついているのには恐れ入った。

真夜中までかかった人生史上最悪の掃除を終え、買ってきたものを食べる気力もなくしてシーツの無い布団の上に転がった。明日の朝一で管理会社に電話しなくてはいけない。あああ、くしょう、なんでこんな目に……。そう思いながら無気力に天井を眺めていると、天井にも何かついているのが見えた。

はびこったカビの大半は白カビだったので、白い壁紙の上に生えていても気が付きにくかった。壁はチェックして全て拭き取ったが、天井は盲点だった。まだやらないといけないのかとウンザリしながら雑巾とカビ取り洗剤をまた出そうとしたとき、おかしなことに気が付いた。

カビが育つには栄養がいるが、壁紙自体は栄養にならないせい

か、私が手を触れたことがない部分にはカビが生えていなかった。天井に触ったことはない。なのに、なぜかカビが繁殖している。

もしかしてカビじゃないのでは？と思って、電気をつけたうえで懐中電灯を持ち、ベッドに立って天井をよく観察してみた。

生えているのは確かにカビだ。一か所にまとまっているのではなく、幅10cm、長さ20数cmの、奇妙な形をしたスタンプをいくつも押したような形で天井に生えている。何だこれほど考えていると、その形が意味する物を理解した。

足跡。

誰かが裸足で歩きまわったかのように、天井に足跡がついている。目では見えないが、残された栄養をむさぼったカビによって形が明確になった。

私はゆっくりと周囲を見回したが、当然ながら何も見えなかった。少なくとも人間の目には。

それから乱暴に天井の“足跡”をふき取って、必要な物を回収して部屋をでた。天井を掃除しているときに、何か見えない物に接触することもなかったと思う。その日は何とか見つけたホテルに泊まり、翌日に管理会社に連絡して保障してもらおう手はずもつけた。

実家に帰ってからすぐに次の部屋を探す手はずを整え、前の部屋には荷造りをする時だけ戻って、夏休みが終わる前に引越した。

次の部屋では、天井に風鈴を下げた。それから何度か引越しをしたが、現在もその習慣は続いている。風もないのに風鈴が鳴ったことはまだない。

喫茶店文芸

2021年1月号

発行 喫茶店文芸

監修 マサユキ・マサオ

編集 氷川省吾

